様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７７０２７５

研究課題名（和文）国分寺・国分尼寺および国府・駅家等出土瓦に関する総合的研究

研究課題名（英文）General study about Roof-tiles of Provincial Temple and Office

研究代表者
梶原　義実（Kajiwara, Yoshimitsu）

名古屋大学・文学研究科・准教授

研究者番号：８０３３５１８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、全国の国分二寺および国府・駅家等の出土瓦を分析することで、奈良時代中期における地方官営施設の瓦葺化に対応した造瓦組織の編成過程および、奈良時代後期から平安期以降における変遷について考察した。
　その結果、国分寺造瓦組織に関する総論的研究および、各国国府・国分寺をはじめとする地方造瓦組織に関する全国的な分析作業と統一基準に基づいた分析、国分寺を含めた古代寺院の造営に関する総合的研究に資する研究成果を得た。

研究成果の概要（英文）：In this study, we have analyzed roof-tile of provincial office and temples. And I considered the formation process and changing of roof-tile workshop in the Nara and Heian era. As a result, we have got results of research to contribute to general study and nationwide analysis on roof-tile craftsmen organization for building provincial offices and temples and general study about building ancient temples.

研究分野：考古学

キーワード：考古学　国分寺　古瓦　造瓦組織　日本史学　仏教史学

１．研究開始当初の背景

従来の古代瓦研究は、瓦の動きが当時の政治的動向を反映・代表しているということを大前提とし、律令国家における地方支配のあり方を、画一的で強制的なものととらえる考え方が主流であった。

しかし、発掘調査事例の増加により、瓦の動きと、例えば寺院の伽藍配置など他の諸要素の動きとが一致しない例が数多く見られるようになった。律令期に関する考古学者の前提を再考した、異なる目的意識下でのあらたな研究法を提案することが、歴史考古学においては急務であった。

本研究の代表者である梶原は、奈良時代に各国に造営された国分寺の造営に注目し、国分寺造営における瓦の生産・供給体制の復原をおこなってきた。この中で、国分寺造営をはじめとする中央政府の対地方政策は、ただ単にすべてを揃えるのではなく、必要性・重要度に応じた部門別の対応を図り、地方生産組織を正確に把握し活用することで労働力や技術を効率的に確保するという手法であったと想定し、また古代瓦の研究手法として、特定の「中央系」文様だけを分布論的に追うのではなく、造瓦組織総体を比較検討し、それに意味を付していく研究手法が、現在の瓦研究の中では急務と説いた。

２．研究の目的

研究代表者の国分寺瓦に関する研究は、上記のように多くの成果に富むものであったが、その一方で、全国六十余の国分寺のうち、分析の対象としたのは半数に満たず、先行研究への問題提起および、あらたな律令期地方手工業生産組織のモデル提示や、造瓦組織論という研究手法の提起が主たる内容であった。

本研究費を使用し、国分寺や、国分寺と同様に国司が造営に関与した国府や駅家等官営施設の造瓦組織、また該期の地方寺院の造瓦組織などとの関係について、すべての国において、筆者の構築した造瓦組織論を中心とした国分寺瓦研究のモデルに従いつつ、一律の分析基準にもとづいた検討をおこない、奈良時代から平安時代にかけての地方造瓦組織の全国的な総体と、その地域的偏差や時期的変遷過程をあきらかにしていき、ひいては地方における寺院政策や、官営諸施設の造営に関する実態を復原することを、本研究での目的として設定した。

本研究費における研究期間内に、その作業を完結させ、全国的な資料集成にもとづいた論考を執筆することを予定し、研究計画を立てた。

３．研究の方法

研究計画を具体的に達成するため、４ヶ年にわたる研究計画を立てた。

本研究は基本的に単独でおこなう研究であり、自身が各地の博物館・教育委員会・埋蔵文化財センター等に収蔵されている官衙・寺院等出土瓦を実見し、瓦当文様および製作技法双方からの、総合的なデータ収集をおこなっていく。その対象は全国となるが、４年間の研究予定期間の中で、全国の国府・国分寺等出土瓦のうち、これまで充分に吟味できていなかった地域や、論文として上梓するに至っていなかった地域の瓦を、総合的に通観する調査計画を立て、遂行した。

調査にあたっては、個人で資料所蔵先に出向くことがほとんどになるが、対象となる資料数が多い場合は、図面作成や写真撮影のアシスタントとして、大学院生を帯同して調査にあたった。また、それぞれの地域の最新の研究動向については、現地で調査担当者や研究者等との意見交換をおこなったり、現地の図書館等で地元の研究雑誌を熟読するなどして入手する必要があり、そちらの作業も並行しておこなった。

４．研究成果

本研究では、全国の国分二寺および国府・駅家等の出土瓦を分析することで、奈良時代中期における地方官営施設の瓦葺化に対応した造瓦組織の編成過程および、奈良時代後期から平安期以降における変遷について考察した。その結果、以下のとおりの研究成果をあげることに成功した。

（１）国分寺造瓦組織に関する総論的研究

全国の国分寺・国分尼寺における造瓦組織に関して、その技術系譜や組織編成のあり方についての、総論的な研究論文を上梓した。

「古代日本における造瓦技術の変遷」（『考古学ジャーナル』652）においては、日本古代の造瓦技術について通観しているが、その中で、横置型一本作りという特徴的な技術について、平城京と各国国分寺の関係を論じている。

「国分寺成立の様相」（『考古学ジャーナル』680）では、国分寺創建期の造瓦組織において、中央系の文様や技術のみならず、在地系のそれが多く含まれることを強調し、国分寺造営における在地の生産力の活用について論じている。

また、「瓦があらわすものとは」（『考古学研究 60 の論点』）では、古代瓦研究において、これまでどのような手法で何があきらかにされてきたのか、またどのような問題点があるのかを、いくつかの代表的な研究事例を引用しつつ論じている。

（２）国府・国分寺等地方官営造瓦組織に関する全国的な集成作業と、統一基準に基づいた分析

全国の国府・国分寺・国分尼寺・駅家等の地方官営諸施設に関して、各国ごとのその造瓦工房の編成のあり方と展開についてあきらかにするという、全国的な集成的研究をおこない、逐次論文として上梓した。

「東海道・東山道の国分寺瓦（１）－尾張・美濃国分寺について－」（『日本古代考古学論集』では、尾張国分寺出土瓦の年代についての筆者説を修正するとともに、美濃国分寺の主要瓦が尾張国分寺の系譜を引くと論じ、その創建年代は天平宝字年間以降に降る可能性を指摘した。また不破関や美濃国府等、美濃における官系瓦について、その系譜と年代を整理した。

「瓦からみた北陸道の国分寺」（『美浜町歴史シンポジウム記録集 10』）では、北陸道西半（若狭～能登）の国分寺やその他諸施設の出土瓦について整理した。この地域は国分寺の旧寺転用を論じる際に取り上げられることが多いが、筆者はすくなくとも奈良時代においては、国分僧寺の旧寺転用はみられず、かならず新造するものとして、遂行されていったものと論じた。

「信越地方の国分寺瓦」（『名古屋大学文学部研究論集』188）では、信濃・越後・佐渡国分寺の出土瓦について整理し、国分寺造営以前の造瓦伝統が少ないこれら諸国における、国分寺造営に伴う造瓦組織編成のあり方について論じた。とくにその中で、各国ともにその造営はやや遅れつつも、奈良期のうちに国分寺造営に取り掛かっていた可能性が高いことを指摘した。

その他、まだ刊行には至っていないものの、「東海道・東山道の国分寺瓦（２）」では伊賀および駿河・伊豆の各国分寺を中心とした８世紀以降の瓦生産について論究しており、「畿内国分寺の諸相」では、筆者がこれまで取り扱ってこなかった畿内の国分寺について、山背と河内を題材に論じている。

以上のとおり本研究では、中部地方および近畿地方における、国府・国分寺を中心とした地方造瓦組織について集成的に通観している。他の地域についても資料収集は進んでおり、適宜論文を刊行していく予定ではあるが、関東地方は須田勉氏らを中心に国分寺

に関する研究の厚い地域であり、中国・四国地方については妹尾周三氏が、九州地方については早川和賀子氏がそれぞれ精力的に論文を上梓している。筆者もこれら諸研究の見解に基本的に賛同するものであり、若干のあらたな知見や私見を加えつつ、総合化に向けての作業を今後とも遂行していく予定である。

（３）国分寺も含めた古代寺院の造営に関する総合的研究

国分寺の造営に関連する研究として、筆者はこれまで、国分寺を含めた古代寺院の立地や周辺環境と、寺院への瓦の生産と供給のあり方を総合的に分析しつつ、古代寺院の造営背景に迫る研究を遂行してきた。

「九州北部地域における古代寺院の展開－豊前・筑前の寺院選地を中心として－」（『九州考古学』89）では、豊前および筑前の古代寺院の立地と出土瓦について総合的に扱っているが、本研究課題に関連する部分としては、老司式・鴻臚館式など大宰府系古瓦の展開過程から、各国における国分寺造営やその他寺院の新造・修造過程について整理した。

「讃岐地域における寺院選地」（『名古屋大学文学部研究論集』185）では、讃岐の古代寺院の立地と出土瓦について扱ったが、本研究課題に関連する部分として、讃岐国分寺・国分尼寺式瓦の国内諸寺への展開過程について整理した。

これらの諸成果を含んだ単著を、『古代地方寺院の造営と景観』と題して、吉川弘文館より2017年10月に刊行予定となっている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計15件）

①梶原義実 2017「信越地方の国分寺瓦」『名古屋大学文学部研究論集』188、25-45頁、査読有。
②梶原義実 2016「東海道・東山道の国分寺瓦（１）－尾張・美濃国分寺について－」『日本古代考古学論集』、409-423頁、査読無。
③梶原義実 2016「瓦からみた北陸道の国分寺」『美浜町歴史シンポジウム記録集』10、15-33頁、査読無。
④梶原義実 2016「讃岐地域における寺院選地」『名古屋大学文学部研究論集』185、83-100頁、査読有。
⑤梶原義実 2016「国分寺成立の様相」『考古学ジャーナル』680、22-26頁、査読無。
⑥梶原義実 2015「古代手工業生産組織の復原に向けて」『考古学フォーラム』22、30-31頁、査読無。
⑦梶原義実 2014「九州北部地域における古代寺院の展開－豊前・筑前の寺院選地を中心として－」『九州考古学』89、41-61頁、査読有。
⑧梶原義実 2014「瓦があらわすものとは」『考古学研究60の論点』、63-64頁、査読有。
⑨梶原義実 2014「国分尼寺の造営過程に関する基礎的考察」『名古屋大学文学部研究論集』179、57-68頁、査読有。
⑩梶原義実 2014「古代日本における造瓦技術の変遷」『考古学ジャーナル』652、11-15頁、査読無。

〔学会発表〕（計５件）

①梶原義実・大塚友恵「東海地域における瓦陶兼業窯の生産構造」、日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究　第１回研究会、大阪大学、2016年12月17日。
②梶原義実・竹原弘展「蛍光X線分析からみた猿投窯東山地区における中世瓦の生産と供給」、日本文化財科学会第30回大会、弘前大学、2013年７月６～７日。

〔図書〕（計０件）

６．研究組織

(1)研究代表者：
梶原　義実（KAJIWARA Yoshimitsu）
名古屋大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：80335182